

惟喬親王ゆかりの鷹塚山碑 見やすい場所への 移転要望が実現へ

本会は平成27年1月16日、枚方市長へ「鷹塚山碑」に関する要望書を提出しています。「鷹塚山碑」とは、鷹塚山配水場（枚方市高塚町）にある石碑のことです。平安時代の前期、交野が原で遊獵した惟喬親王（注）が死んだ愛鷹をこの地に埋めたという伝承により、約100年前に建てられたものです。

「鷹塚山碑」の古い写真としては、昭和6年（1931年）に秩父宮親王と同妃殿下が枚方の万里荘にご滞在になったとき、枚方の名所を紹介したとき、枚方の名所を紹



平成26年撮影

介するため撮られた写真の中に残っています。その後、碑は配水場の門扉から10mほど奥に移り、外からは見にくく、かつてはあった台座もなくなっていました。



第88号

発行

宿場町枚方を考える会
会長 堀家 啓男
072-892-5504

事務局

枚方市出口2丁目6-6
上野幸夫 072-832-5722

編集 広報委員会

主な内容

- 鷹塚山碑の移転実現へ（1頁）
- 茄子作・私部周辺を散策（2頁〜5頁）
- 寺内町の成り立ちと終焉（6頁〜10頁）
- 枚方ゆかりの女性たち（11頁〜13頁）
- 大戦を終結に導いた総理（14頁〜20頁）

ておりましたが、平成29年2月から始まった「鷹塚山配水場更新工事（土木工事）」の一環として、門扉の左外側に移転される予定になりました。同工事は平成32年5月が完工予定のため、移設された碑が見られるのは少し先になります。

惟喬親王

文徳天皇（第55代）の第一皇子、母は紀名虎の娘、藤原良房の娘を母とする第四皇子の惟仁親王（後の清和天皇）との立太子争いに敗れ、山崎の水無瀬や交野の渚に別荘を設け、在原業平らとともに遊獵、作歌に憂さを晴らしたといわれています。

近郊の史跡を歩く会

茄子作・私部方面を散策

交野市 伊東征八郎

宿場町枚方を考える会の恒例行事「近郊の史跡を歩く会」は平成30年5月20日、「茄子作・私部方面」を散策しました。午前9時30分に京阪電車交野市駅に集合、会員など参加者33人が約3.5キロを2時間30分かけて歩きました。

古代条里制碑

まず、交野市駅のバスロータリーで参加者を2班に分け初めはロータリー横にある「古



代条里制4条通りの碑」の説明を受けました。

古代条里制とは、奈良時代の中期に取り組まれた土地区画整理事業です。交野地方では、交野の私市から枚方の禁野までの間が区画されました。

砂子坂

スーパーイズミヤの駐車場を横に見ながら道路を進み、さらに堤の信号を左に折れると砂子坂の交差点があります。信号機の表示は「すだこざか」となっていますが、傍にある歩道橋には「スタコ坂歩道橋」という名が付けられています。さらに信号を渡った前川に架かる橋名は「スタコ橋」となっていました。



この地は、古くは「スタコ坂」と言っていたそうで、北田家（私部の代官屋敷／後述）の古文書に書かれている天野川の中州？に土砂が堆積した小高い台地で、今の交野駅や梅が枝団地（旧地名の西の口や長砂）へ下る場所で、「砂子坂（スタコ坂）」と付けられていたそうです。

前川を渡り進むと天野川があります。架かる橋は逢合橋と言います。七夕伝説に因ん



逢合橋の傍らに万葉歌碑があります。説明板には「彦星と織女と 今宵逢う 天の川門に 波立つなゆめ (読み下し本文) 万葉集 卷十の二〇四〇 作者不詳」と記されています。

万葉歌碑

で昭和52年(1977年)に付けられた橋名で、宝暦12年(1762年)に記された「河州交野郡私部村田畑絵図帳」では、「天ノ川橋」と表記されています。

逢合橋をさらに進み、私部の西の信号を渡り、美容院の角を左に進むと東高野街道を歩くこととなります。

東高野街道は、高野山への参拝を目的とする街道です。京都の東寺から、八幡・枚方の峠・高野道・出屋敷へ、さらに交野の郡津・私部・星田を通り、寝屋川・四條畷・大東などを経て、河内長野から高野山に至ります。平安時代には河内を縦貫する道として利用され、人々の往来がありました。

本尊掛松跡

東高野街道を進むと街道の右に「本尊掛松跡」があります。玉垣の中に大きい地藏様がおいでになり、光背の左に「法明上人御舊跡勸進紗門」、その裏に「弘化」二己年(1845年)4月24日世話人交野門中」と彫られています。



後醍醐天皇の元享元年(1321年)12月15日の夜、摂津深江の法明上人に「男山八幡宮に納めてある融通念仏宗に伝わる霊宝を授かり、法灯を継ぐように」との夢告げがありました。

上人は弟子12人を連れて男山へ向かいました。上ん山(うんやま)まで来ると、霊宝を深江に届けようとする男山からの社人ら一行と出会いました。16日のことでした。両者は喜んで宝器を授受し、松の開山大師感得十一尊曼荼羅

を始め、軸の尊像を掛け、鐘を叩きながら松の周囲を踊ったといわれています。この付近が枚方市の最南端です。

上の山の辻

本尊掛松跡から交野市域に入ると「上の山の辻」に出ます。この辻は、東高野街道と山根街道の分岐点で道標や地藏が立っています。



関武駐蹕記念碑

この辻の山根街道沿いに「関武駐蹕(えつぶちゆうひつ)

記念碑」があります。大正3年(1914年)、陸軍秋季特別大演習の際に、大正天皇が演習状況を総監したことを記念した碑です。



逢合橋に戻り、スタコ坂の信号を右に進み、高架下をくぐって京阪電車の踏切を渡ると、右手に交野市の武道館があります。ここで小休憩となりました。

北田家住宅

山根街道は、八幡から、長尾、津田、私部の集落を通って上の山の東高野街道の分岐

点に至る道で、東高野街道の脇道として利用されてきました。街道筋を私部集落の中へ進んで行くと、北田家住宅があります。

北田家住宅は、国の重要文化財に指定されている建物で、地元では代官屋敷と呼ばれています。主屋は宝永から享保年間(1708年~1734年)にかけて建てられました。



中でも立派な長屋門は、天保14年(1843年)に建てられたもので、長さは55.9

メートルもあり、民家では日本一の長さです。

札ノ辻

北田家住宅の長屋門前を進むと四差路に出ます。札ノ辻といわれている場所です。この辺りには、想善寺、無量光寺、光通寺と、私部のお寺が集まっている所で、人々が寄ってくる場所であったため、高札場があったことから札ノ辻といわれています。

札ノ辻を抜け、無量光寺、想善寺、光通寺と回り、私部城跡へと向かいました。

無量光寺

浄土真宗西本願寺派のお寺で、ご本尊は阿弥陀如来立像。梵鐘は享保15年(1730年)の作品で、先の大戦時における供出を免れていました。交野の「郷土史かるた」に

「軍書読み人の集まる無量光寺」があります。軍書読みとは、保元物語や平家物語などを、琵琶法師が節をつけて聞かせたもので、19世紀の始め頃、無量光寺の軍書読みが有名となり、多くの人々が集まったそうです。



想善寺

西山浄土宗のお寺で、ご本尊は阿弥陀如来立像です。天正年間(1573年~92年)、この土地の惣善という人がお堂を建て、念仏生活をしたの

が始まりとされています。寺名は、この念仏行者「惣善」に由来しています。



想善寺本堂

その後、遍空上人の代になると、堂宇（堂の軒）の腐朽がひどくなり、広く有縁無縁の奉加を求めたところ、檀家富田武右衛門はその私財を捧げ、また当地の領主であった畠山義紀から多くの喜捨を得て、寛政2年（1790年）に、本堂、庫裡、山門などが総瓦葺きで再建されました。これにより、寺観は一新され

たので、遍空上人は当山中興といわれています。

光通寺

臨済宗東福寺派のお寺で、ご本尊は聖観音立像です。正平（南北朝）の頃、赤松則村が建て、応永9年（1402年）に僧別峯が寺に入り開山となりました。後に足利將軍から寺領をもらい、將軍家の祈禱所となります。石垣の2カ所には石仏が彫られています。



薬師如来坐像



阿弥陀如来坐像

私部城（交野城）跡

城主は安見氏。戦国時代に築城された城郭で曲輪（くるわ）が現在も残っています。



大阪府の平野部に残る中世の平城としては貴重な遺跡です。私部城が建っていた場所は古い地名で「城」と言います。また、本郭、二郭が建っていた場所は、それぞれ「城」、「天守」という小字名がついています。これらは江戸時代につけられた地名です。

城の東側は「市場」と言い、光通寺に残る古文書から城よりも古い地名であることが分かっています。また、城のすぐ南側には「出屋敷」という

地名が残っています。名の由来は、一説として私部城の武士たちが城から出て、屋敷を構えたためといわれています。

この付近は、東高野街道や警船街道、私部街道が通っており、京都・摂津・河内・大和を結ぶ要衝で、室町時代には光通寺を中心に栄えていました。街の中心であったことから、戦国時代になりこの地へ私部城が建てられたと考えられています。



私部城跡 現地説明板

戦国期、枚方に3つの寺内町

成り立ちと終焉

交野市 堀家啓男

はじめに

戦国期、蓮如上人の出口への進出以降、河内各地の水運や流通拠点などに約20カ所の寺内町が誕生します。寺内町では、核となる真宗寺院と門前一帯が寺内(境内)とされ、特別な保護が認められて自由な商業活動が展開、町衆の自治的な動きもみられました。寺内の防御のため、周囲に池や堀を造り、土居をめぐらし、町割りを行い、木戸を設けるなど、まとまった町として繁栄するところもありました。真宗系の寺内といってもそこに暮らす人がすべて門徒というわけではありません。枚方寺内の場合、昔からの鎮守では秋祭が行われ、門徒を含めた村人が踊りの輪に参加していたのです。そのような寺内町が枚方に、どうして出口・枚方・招提と、3カ所

も誕生したのか。その理由、それぞれの成り立ちから、どのような終焉を迎えたのかを追いました。

蓮如、出口に草坊を開く

越前福井の吉崎御坊を出た蓮如上人(以下、蓮如。真宗8世1415〜99年)は文明7年(1475年)秋、摂津富田を経て淀川を渡り、茨田郡出口にやってきました。水運の便を考慮したからです。弟子の光善が葦原を埋めて草坊を用意しました。蓮如はさつそく坊と町の整備を進め、また各地へ活発な布教活動を行います。草坊は後の光善寺で、長男の順如が初代の住職となります。寺を浸水から守る堤や町割りを行います。寺を北西に置き、町は東と南に広がり、東ノ町、中ノ町、北ノ町、西ノ町に分かれ、町の南は地下と呼ばれたそうです。

旅人のための宿ができ商人も活躍し、番衆という軍事的役割の者もいるようになったそうです。寺内町の先駆けでした。光善寺住職順如は文明15年(1483年)死去し、長男光淳が跡を継ぎます。光善寺本堂は天文3年(1534年)、火災に遭い、一時、鳥飼や大庭などに移転します。その後、慶長期に出口に戻り再建されます。



蓮如のもとを訪れる人が増え、当初9軒であった出口は、山科や大坂の本願寺を結ぶ淀川の津の機能を果たし、賑やかな寺内町の様相を呈するようになりました。

**蓮如、山科本願寺を文
明11年(1478年)
に、大坂御坊を明応6
年(1497年)に建
立、寺内町をつくる**

布教の基盤を整えていた蓮如は文明11年(1478年)、出口を出て山城国山科郷に移り山科本願寺を建立、寺内町づくりを行います。さらに河内、摂津方面の布教の拠点として大坂御坊を明応6年(1497年)に建立します。この地は水運に便利で防御面も最適であった摂津生玉小坂の地でした。後の秀吉の大坂城築城の地と同じです。蓮如の戦略的な用地選びであり、大規模な寺内町を築く礎となりました。しかし、明応8年(1499年)山科に戻った蓮如は85歳で死去します。

山科本願寺は天文元年(1532年)、兵火にかかり焼亡、本願寺は大坂御坊へ移転します。石山(天坂)本願寺です。この混乱の中、本願寺は門徒の多い近江や北陸との連絡、交通網を再編し、門徒掌握のため、大坂の周辺各地に宗主の一族を住職とする多くの寺内町ネットワークを立ち上げます。北河内でも石山本願寺を要とする水陸の交通路沿いに真宗系寺内町十数カ所のネットワークが作られます。

**淀川流域でのネット
ワークの拠点、枚方御
坊の建立。永正11年
(1514年)、その
後実従の順興寺へ**

当時の出口は淀川の洪水や浸水が避けられず、蓮如の意向もあり淀川流域での安全な新しい御坊と寺内町の必要性

が高まります。これを受けて三矢浜(津)の水運を利用して、しかも水害の心配のない台地で、戦乱の時代における防壁となる地形に恵まれた枚方丘陵突端の地、蔵谷(くら)のたに/地名は実従の「私心記」の記述によります。現在の枚方元町あたり)で、本願寺直轄(兼帯所)の御坊づくりが行われます。三矢にはすでに道場(後の淨念寺/明応9年1495年建立)がありましたが、秀吉の文禄堤ができておらず、水害の心配のない適地を求めたのが枚方丘陵の台地、蔵谷だったのです。

永正11年(1514年)蓮如の後継、真宗9世実如(蓮如第8子)により御堂が完成(「郷土枚方の歴史」枚方市)

します。御堂を中心とした寺内町の立ち上げは実如直轄で進められます。現在もこの地には、寺内町の昔さながらの

道筋が残り、地元の人々によって寺内を思わせる上之町(上町)や蔵の谷(蔵谷)中坂、御坊山といった地名が使われています。枚方寺内に商人や職人が移り住み、商活動を展開するなど、町衆の活躍がみられるようになります。

その後、本願寺で宗主の側近であった蓮如の第27子十三男、実従(じつじゅう61歳)が永禄2年(1559年)、蓮如の子という教団のシンボルとして、また枚方寺内の発展を期待した長衆(おさ衆/寺内のリーダー)の度重なる招きを受け、枚方御坊に住職として移り住みます。

枚方御坊は寺名を変え、実従開基の順興寺(じゅんこうじ/実従の号からとったもの)となります。有能な実従は御堂を壮麗なものに整備、町衆の協力を得て寺内(実従は日記「私心記」で「寺内」と呼

んでいます。当時は寺内町と言わなかったようで「寺内町」は研究用語です)にふさわしい堀や土塁の整備を行い、本格的な町を形成しました。商人ら町衆が活躍した大坂本願寺の寺内町に似た賑やかな町であったようです。(淀川中流域における寺内町の展開」天野太郎著 足利健亮先生追悼論文集)

翌永祿3年(1560年)織田信長の桶狭間の戦いのあった年)には順興寺は門跡本願寺を支える院家の有力寺院の一つとなります。実従は順興寺で過ごした期間を含む日記「私心記」を残し、枚方寺内を語る貴重な史料となっています。(「東海道枚方宿」枚方市に「私心記」の詳しい内容が紹介されています)

参考図1 枚方寺内復元図
市史年報第6号「枚方寺内の甕倉」西田敏秀著より



順興寺、枚方寺内町の終焉 元龜元年(1570年)

元龜元年(1570年)6月、本願寺と信長軍との11年にわたる石山合戦が始まります。信長公記によると、同年8月20日、岐阜を立つた信長は25日、枚方寺内に陣取りします。この陣取りのとき、枚方寺内が信長軍にどのような対応をしたのかは不明ですが、5年後の天正3年(1575年)、寺内の油屋にあった24口以上の「荏胡麻油」の大甕が意図的に破壊されています。

この破壊は、平成14年に実施された大隆寺境内(枚方元町)の発掘調査により、当時の甕倉の焼け跡が発見され、判明しました。



この焼け跡近くで信長に近い法華宗系の大隆寺が建立されていることから、この陣取りのとき、順興寺住職頭従や寺内衆は脱出したようで、頭従は石山本願寺に戻り、慶長10年(1605年)に死去しています。順興寺や寺内は焼亡したのか、破壊されたのか、御坊完成から56年後、信長陣取りの8月20日が枚方寺内の終焉の日だったようです。

順興寺は頭従の孫により後に京都市内で再建されます。東本願寺系の願生坊(がんしようぼう)は慶長9年(1604年)、教如によって蔵の谷の三矢に近い別の地に建立されます。

江戸時代の「河内名所図会(1801年)」には順興寺の旧址は願生坊の南老丁とされていますが、寺跡はいまだ不明です。「枚方寺内復元図」の位置では老丁以上になりますし、三矢から遠過ぎる感じがします。私は、周辺の丘陵に囲まれた御坊山(山上に実従、幼名九九丸の墓があります)の上り口がある枚方元町(蔵谷)の元司法省(旧枚方区裁判所跡)用地跡周辺の平坦地と想像しています。幸い現在の枚方元町(蔵谷)や枚方上之町(上町)は近世以降も大きな変化がなかったため、今後の諸所の発掘により新たな

発見があり、順興寺の場所や寺内終焉の日が確定できるかも知れません。

蓮淳らによる招提寺内町の立ち上げ 天文11年(1542年) まるでベンチャー企業の立ち上げ

石山本願寺や北摂、八尾などの河内地域の寺内町を結ぶネットワークの一環となったのが招提寺内町の形成です。守護不入の寺内町として天文11年(1542年)に建設されます。(市史年報別冊「招提村片岡家文書の研究」市史資料室)

河内国牧郷(現在の牧野付近)のあたりは応仁、文明の乱で荒れ果て、無主の荒地地となっていました。石清水八幡宮に仕える二人の侍衆(小篠兵庫房純、片岡五郎右衛門

正久)は、久宝寺寺内町の蓮淳(蓮如50歳のときの子で第13子六男、真宗10世証如の外祖父)を招き、東高野街道近く(この頃、京街道は未開通で、東高野街道が主な交通路でした)に真宗道場とその寺内を立ち上げます。方八町の縄張りを行ったと言います。この地が招提です。地元の人

は「しよだい」と言います。蓮淳は天文11年(1542年)に久宝寺の蓮如開基の西証寺に招かれ、自分の号である顕証寺とするとともに、荒地に新御堂や御亭を完成させ、町場をつくり久宝寺寺内町を整備しています。

本願寺でも有能なやり手で通っていた蓮淳を、久宝寺寺内の立ち上げの最中を押して顕証寺の兼帯の形で招いたのです。八幡宮境内郷中での経済的、宗教的諸活動の知験をもっていた小篠、片岡の2人

は、淀川沿いに南下していた八幡宮関係者の情報を活かし、無主の荒地地に照準をおき、交通網上、地理的、時期的にかなった真宗寺内町ネットワークの一角をこの地で目指したのでしよう。まさに風雲の時代に大きな夢をいだいた侍が、八幡宮金融業者らの資金的支援を受けて起業家のごとく、自治的な流通拠点となる寺内町を起業したとも言えます。

水難の心配のない高台に位置を定め、御堂(招提道場といえます。寺内町の終焉後、元和7年/1621年に敬応寺と改称)をおき、周辺に寺内をつくりました。

堂の周りに囲いをつけるため東の低地の谷に堤、溜池(御堂池 地元の人「みどいけ」と言います)を築き、堂の岸より南へ2町に土居を構え、西へ土居を築き廻らせ、西の

細き谷筋に用水抜き溝を通す、北の野より南の野へ大通りを通し大木戸を構える、東と北に小木戸口をつける、極めて計画的な町づくり行ないました。この町割りには江戸期にも残り、現在も道として引き続き残っています。復元の小字でも北ノ口、門口、寺内に中町、東町、西町、横町などという地名が残っているそうです。

参考図2 招提寺内町推定復元図

(参考 「枚方市における旧寺内町に関する研究(その1)」枚方市より)



招提寺内町の終焉

元龜元年（1570年）9月、織田信長と石山本願寺の開戦に際して、信長からその立場を問われた招提寺内町は無勢のため、やむを得ず信長側に従います。それでも本願寺との戦いにあたっては鉄砲に弾を込めず、矢の根をぬいたと言います。

顕如は天正8年（1580年）、信長と和を結び、本願寺は石山から撤退し、紀伊鷲森御坊に退去します。招提寺内町は合戦を生き延びたのです。しかし、それもつかのま天正10年（1582年）6月、領地安堵を授けた信長が本能寺で自刃、その敵討ちで秀吉が進軍し、山崎での天下分け目の合戦となります。

光秀側に参加した招提寺内町の衆は敗戦し、不入の特権をなく奪われ、招提は勝者秀

吉の給人の年貢地となり寺内町は約70年で終焉を迎えました。

枚方寺内から三矢へ、秀吉の先見性、やがて枚方宿となる

終焉を迎えた枚方寺内の商人ら町衆は、舟運の便があり、古くから「三屋関」として史料にも出てくる町場の三矢へ移り、その発展に寄与したと思われます。津のある町場として三矢村の立地を陸路と水防の文祿堤の整備に活用した秀吉は、隣村の岡村についても堤上へ移転させ、将来、両村を宿駅として発展させようと考えていたようです。

後の枚方宿繁栄の生みの親は、枚方寺内の経済的、社会的基盤を継承した町衆の活動であり、その立地に着目し、三矢に文祿堤を築いた秀吉の先見性であったといえます。

秀吉が枚方寺内に近い三矢の丘陵に茶屋御殿（小休所）を設けたのも、三矢を京街道と三矢浜のある交通の要衝と考えたからで、蓮如と同じ発想といえます。（ここに女性をおいたというのは秀吉に失礼かと思えます。またこれに関して枚方城が歴史上存在したかのような話もありますが確かではありません）

この結果、三矢と岡には舟運と陸路を利用する旅客の宿泊施設も増え、需要に応じて岡新町村、泥町村もでき、大坂夏の陣のあと、公儀（徳川幕府）から4カ村が枚方宿に指定されます。

枚方宿が「枚方」と名付けられたのは、基盤となった枚方寺内の歴史に由来するものと考えられています。

〔文献からみた枚方宿成立前夜〕西田敏秀著 枚方市文化財研究調査会研究紀要第4

号 同会

その生い立ちから自治的な町衆の活躍が期待された招提は、光秀側につくという失敗の結果、寺内町としての存続期間が短く、発展途上で終焉を余儀なくされました。また、文祿堤の整備以降、京阪間の交通には遠かったことから、商工業者は四散し、町場は衰退、やがて近世純粹の農村に化していきます。江戸初期の招提村は他村に比べ屋敷高が多かったそうで、寺内町の名残を残しています。

真宗中興の祖、蓮如のシンボリックな初期寺内町、出口、そして寺内町ネットワークの典型であった東高野街道の流通拠点、招提、及び信長に果敢に立ち向かった寺内町枚方、枚方宿の卵核ともいえる町衆の活躍、それぞれ枚方の中世末、近世初頭を飾る歴史のひとこまでです。

枚方ゆかりの女性たち

小倉東町 平良 一郎

平成26年8月から27年12月までの17回にわたり、「広報ひらかた」に「ひらかた偉人伝」という記事が連載されてきました。枚方ゆかりの偉人を紹介するコーナーで、17人が登場しています。

ところが、これはすべて男性ばかりです。枚方市には女性の偉人はいないのでしようか。調べてみると、枚方にも歴史上有名な女性がいますので、「ひらかた偉人伝・女性編」として、枚方ゆかりの女性6人を紹介します。

正一位を追贈された 田口姫（たぐちひめ）

奈良時代後期に、枚方で生まれ育った女性です。本名は田口三千。

天平神護2年（766年）頃に河内国交野郡小山（現在の枚方市田口）で生まれました。父は武内宿禰の後裔である田口朝

臣（本貫地は大和国高市郡田口村）の田口家主。田口姫は太政大臣橘奈良麻呂の子、清友の妻になりました。

当時は通い婚の時代で、結婚しても妻は実家で暮らしていました。夫の橘清友は、山城国綴喜郡玉井（現在の京都府綴喜郡井手町）に住んでおり、馬を飛ばして1時間ほどの距離を通っていたようです。

清友は体格の良い美男子だったそうで、田口姫もかなりの美人であったと思われます。そんな美男美女夫婦から、橘嘉智子が生まれます。

美貌に恵まれた娘嘉智子は、やがて嵯峨天皇の皇后になり、仁明天皇を生んだことにより田口姫は仁明天皇の外祖母となつて、夫の清友とともに正一位が追贈されました。

三千の墓は、府道144号（杉田口禁野線）の山田交番前交差点近くにあり、傍らには

枚方市教育委員会が設置した説明板「仁明天皇外祖母（田口姫）の墓」があります。



枚方出身の皇后 橘嘉智子（たちばなのちこ）

第52代嵯峨天皇の皇后、諡号は壇林皇后。枚方で生まれ育った女性です。橘清友、田口三千の娘として、延暦5年（786年）に生まれました。

橘氏は「源平藤橘」といわれる四大姓の一つですが、他の三つの姓の家があまりにも勢力を持ち続けたため、歴史の表舞台にはあまり出てきません。古代には橘諸兄（橘氏に臣籍降下した元皇族）や藤原不比等の正室がいる程度で、嘉智子は史

上唯一の橘氏出身の皇后です。

彼女は歴史上有名な美人で小野小町と並び称されるほどで、嵯峨天皇が親王の時に入侍し、即位後の大同4年(809年)6月に夫人となり、弘仁6年(815年)に皇后に立てられました。橘氏出身としては最初で最後の皇后です。嵯峨天皇との間に仁明天皇(正良親王)、正子内親王(淳和天皇皇后)のほか2男5女をもうけました。

菅原道真の娘ですが、本名および生年没年は不詳です。菅原道真には11男4女がおり、4人の娘、衍子、尚子、寧子、俊子のうち、苅谷姫がいずれかは不明で、養女との説もあります。菅原道真は平安時代の学者です。文章博士となり、宇多天皇の信任が篤く、右大臣に昇りましたが延喜元年(901年)、京の都から九州の大宰府へ左遷されました。

嵯峨の地名縁起になった
苅谷姫(かりやひめ)

嵯峨上皇の崩後も太皇太后として朝廷で隠然たる勢力を有していました。橘氏の子弟のために大学別曹学館院を設立するなど勢威を誇り、実子の仁明天皇の地位を安定させるため、承和9年(842年)に起きた「承和の変」にも深く関わったといわれます。

都に残された人々の中でも道真が特にかわいがっていた苅谷姫は、父を慕って河内国茨田郡中振の地まで来ましたが、道真はすでに出発した後で、逢えませんでした。

苅谷姫は道真が都を眺めたという丘の上に立ち、遙かに西を望み、足摺り(さだ)して悲

しんだので、その後いつとはなしに、このあたりは「嵯陀」といわれ、嵯陀山・嵯陀川・嵯陀池の名がつけました。

大宰府でその話を聴いた道真は、三尺二寸の自身の木像を作つて苅谷姫に送りました。社伝によると天曆5年(951年)、村人が嵯陀山に社殿を造営、この木像を祀り、近隣5村の産土神としたのが嵯陀神社の始まりと伝えています。



嵯陀神社

苅谷姫は実在が確認できず、伝説上の女性のようなのですが、口マンに満ちた話ですね。

宮中で活躍した女官
百済王明信(みよこのあきしん)

奈良時代から平安時代初期にかけて宮中で活躍した女官。枚方で生まれ育った女性です。生年不詳。河内国交野郡中宮で生れました。父は百済王理伯。百済王氏は、百済最後の王、義慈王の子である善光を始祖とする日本の氏族。持統朝に百済王の氏姓を賜与されました。右大臣藤原継繩に嫁ぎ、乙叡を生みました。夫は楠葉に住み中宮まで通っていたようです。やがて明信は桓武天皇に気に入られて宮中で昇進し、息子の乙叡も栄達の途を歩みます。

明信と桓武天皇との間には男女関係があったというのが通説ですが、年齢的に見て無理があるようです。桓武の寵は忠節を尽くした臣下夫婦に対するものとみなすべきでしょう。

弘仁6年(815年)10月15日没、従二位でした。

**御茶屋御殿に住んだ
本多 乙(ほんだ おと)**

通称乙御前、百済王の末裔で枚方城主本多内膳正政康の娘、豊臣秀吉の側室。文禄4年(1595年)、秀吉は万年寺山に御茶屋御殿を建て、側室の乙御前を住ませました。伏見城と大坂城に拠点を置いた秀吉は、行き来する途中に立ち寄ったようです。

秀吉は嫉妬深い性格で、乙御前に茶の湯や作法を教えた本多氏の菩提寺である一乗寺(枚方市岡南町)の住職との仲を疑いました。住職は身の潔白を証明するために、自らの命を絶ちました。

心を痛めた乙御前は、秀吉の正室北政所から贈られた打ち掛けを袈裟(けさ)に仕立て直し、寺に寄贈したと伝わって

います。非公開ですが、一乗寺にはこの袈裟と、乙御前が北政所から授かり、秀吉に茶を入れたとされる茶釜が今も残っているそうです。

乙御前のその後の消息はわかりませんが、慶長19年(1614年)の大坂冬の陣の前年に枚方城は徳川勢に攻められて落城していることから、他の側室たちのように落飾して仏門に入り、秀吉の冥福を祈る毎日だったのではないのでしょうか。



御茶屋御殿跡展望広場

御茶屋御殿跡は現在、御茶屋御殿跡展望広場という整備

された公園になり、枚方市民の憩いの場となっています。

**関西外国語大学を創立
谷本多加子(たにもと たかこ)**

谷本多加子は明治39年(1906年)、茨城県真壁郡大和村(現在の桜川市)の柴山家に生れました。柴山家は旧家で、陸軍次官の柴山兼四郎(中将)は叔父にあたります。

大正14年(1925年)3月、東京都港区の頌栄高等女学校を卒業。昭和5年(1930年)、岡山県小田郡稲倉村(現在の井原市)出身で日本大学英文科を卒業した高校英語教師の谷本昇と結婚しました。

昭和20年(1945年)11月、夫の昇とともに大阪市東住吉区田辺東之町の自宅で谷本英学院を創立、このときの生徒数は8人。

「国民がもつと語学を知り、英米諸国のことを理解していた

ら、こんな悲惨な戦争は起きなかった。世界平和のためには語学に精通した若人を養成し国際交流を図らなければならぬ」という固い信念を持ち続けて、理想の実現に邁進しました。

昭和22年(1947年)4月関西外国語学校を開設。昭和28年(1953年)4月、関西外国語短期大学を大阪市住吉区万代西に開設。昭和33年10月、夫の昇が病氣のために理事長を辞任し、多加子が理事長に就任しました。

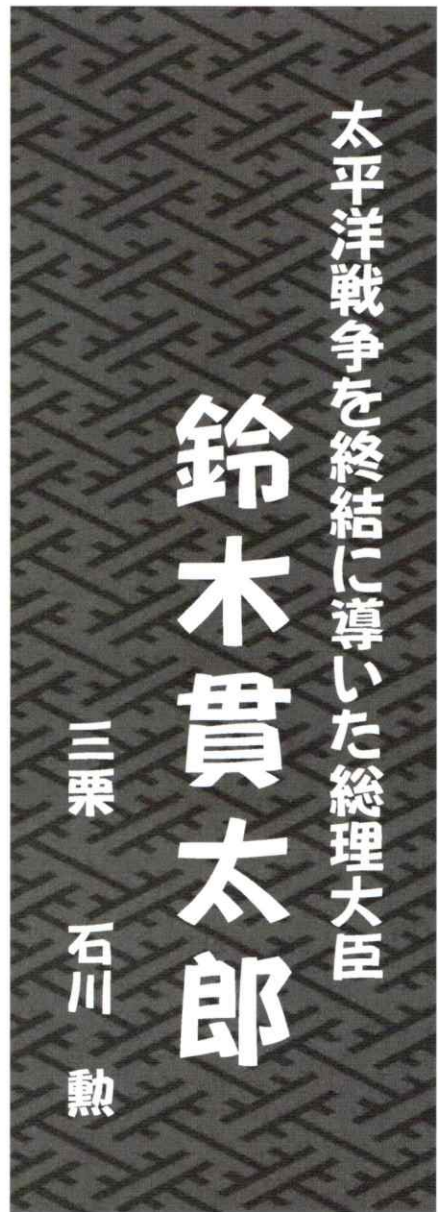
昭和41年(1966年)4月関西外国語大学を枚方市北片鉾町に開設、多加子が初代学長に就任。以後、学研都市キャンパス(穂谷)、中宮キャンパス、御殿山キャンパスに学舎を展開します。

昭和55年(1980年)9月5日、多加子逝去、享年73歳。正五位が追賜されました。

太平洋戦争を終結に導いた総理大臣

鈴木貫太郎

三栗 石川 勲



今年太平洋戦争が終結して73年、その日本史上最大の国難となった戦争を終結に導いた内閣総理大臣鈴木貫太郎（以下「鈴木」という）が没して70年の節目の年です。ここでは主に終戦への過程を中心に鈴木を生涯を紹介します。

私が鈴木を身近に感じたのは平成25年に八丈島を訪れたときです。当時の歴史民俗資料館の一角に天皇が昭和4年5月29日に行幸した記念碑がありました。碑文の揮毫

者として「前侍従長海軍大将 男爵鈴木貫太郎謹書」と刻まれています。



鈴木を「最も評価する政治家」と語っていた枝野幸男民主党幹事長（現立憲民主党代

表は平成27年7月13日、安保関連法案の審議中、「谷垣（当時の自民党幹事長）さんが平成の鈴木貫太郎になれるかどうか問われている」と語っています。これは総理大臣という政権内部にしながら終戦に導いた鈴木と政権与党の谷垣氏を対比したものです。

誕生

鈴木は慶応3年12月24日（1868年1月18日）、関宿藩士鈴木為輔（維新後に由

哲と改名）と妻きよの長男として和泉国大鳥郡伏尾新田（現在の大阪府堺市中区伏尾）で生まれました。「誕生之地」の石碑が現存しています。関宿藩の本領は下総国（千葉県北部など）にありましたが、飛地ながら和泉国の一部も所領としていました。鈴木が生まれたとき、父はその代官として赴任中でした。

海軍時代

鈴木は明治17年、当時は東京の築地にあった海軍兵学校に入校、16歳でした。「官費で外国に行ける」というのがその理由です。卒業時の成績は13位でトップクラスではありませんが、同期卒業生46人のうち、大將まで進級したのは鈴木だけでした。

日露戦争が始まると、装甲巡洋艦「春日」の副長などを経て明治38年1月14日に第

四駆逐隊（旗艦朝霧以下4隻）司令となり、日本海海戦で多くの戦功をあげました。

結婚

鈴木の妻といえば、後述のタカ夫人があまりにも有名ですが、初婚は鈴木29歳の明治30年4月6日、旧会津藩士大沼親誠の娘とよ18歳と結婚しました。鈴木の一男一女はとよが産み育てました。艦上勤務の多い鈴木にとって後顧の憂いのない賢夫人でした。大正元年9月18日、腎臓炎のため鈴木を始め家族に見守られながら他界、享年33歳でした。

再婚

鈴木は大正2年5月24日に海軍少将へ進級、翌年には海軍次官となりました。その翌年の大正4年6月7日、足立タカと再婚、鈴木47歳、タカ31歳（初婚）でした。

タカは明治16年7月4日、足立元太郎と妻常子の長女として札幌で生まれました。明治37年に東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）を卒業、同校附属幼稚園の訓導（教諭）となりました。

東宮侍従長の木戸孝正は明治38年、明宮嘉仁親王（後の大正天皇）の第一皇子迪宮裕仁親王（後の昭和天皇）と第二皇子淳宮雍仁親王（後の秩父宮）を養育する皇孫御用掛（養育係）の推薦を菊池大麓（元文部大臣）に依頼しました。菊池は、孫が通っている幼稚園で保護者の評価が高い足立タカを推薦しました。

タカは明治38年5月13日、東宮御所内に設けられた皇孫御殿に参上、迪宮と淳宮に對面しました。迪宮は4歳とは思えない威厳で、「足立タカと申すか」と声を掛けましたが、すぐにタカの膝に座り、会っ

たばかりの養育係に甘える幼子の一面を見せています。以後、鈴木と結婚するまでの間、養育係を務めました。



迪宮裕仁親王（1歳）

海軍軍令部長

鈴木は大正14年4月15日、海軍の最高ポストである海軍軍令部長（昭和8年から総長に就任しました。57歳でした。在任中、海軍大演習観艦式が2回行われました。

侍従長

鈴木は急逝した珍田捨巳侍従長の後任して、昭和4年1月22日付けで予備役、同日付で侍従長に就任します。

2・26事件

鈴木を評価していたのは内大臣牧野伸顕（大久保利通の次男）でした。天皇の側近として2回にわたる観艦式の連絡調整のために鈴木と会っていました。牧野は昭和天皇の摂政時代から日記を付けており、侍従長に就任する前日には「今後君側の忠に此人を得る事となり実に心強く感ぜり」と大きな期待を寄せています。

昭和11年2月26日、陸軍青年将校による近代日本史上最大のクーデター未遂事件が起こりました。鈴木は「君側の奸」として標的の1人となり、安藤輝三大尉（第一師団歩兵第三連隊第六中隊長）率いる150名余りが、侍従長官邸を襲撃しました。鈴木の部屋に侵入したのは二個分隊、だが誰も来訪の理由を答えず、そこへ下士官2

名が入室、「ヒマがないから撃ちます」「じゃ、撃て」。

鈴木は、眉間、左胸、左肩、左横腹に拳銃弾を受けて転倒、畳の血溜まりは直径1メートルに及びました。兵士が「とどめ、とどめ」と叫んだとき、タカは「とどめだけは、どうか待ってください」と制止、その理由を「まだ主人が息をしますから、生きている間に一言別れを言いたいと思ったから」と語っています。

入室してきた安藤大尉が「とどめは残酷だからよせ」と制止、さらに「閣下に対し敬礼」と命令しました。後年、鈴木はとどめを制止した安藤を「命の恩人」と語っています。

2・26事件など、鈴木は幼いときから幾度も死の淵に立ち、そのたびに九死に一生を得てきました。こうした奇跡の連続について、長男の一人（はじめ）氏は「終戦の大業

に当たらしめんとした天の巧める配慮」と語っています。

内閣総理大臣

東條内閣を引き継いだ小磯内閣が米軍の沖繩上陸を引責して総辞職することになり、後継を選ぶ重臣会議が昭和20年4月5日午後5時から開かれました。出席者は歴代の総理経験者が6人、枢密院議長鈴木、そして主宰者である内大臣木戸幸一（木戸孝正の長男）の8人です。

半ば根回しができていた重臣会議は、天皇の信頼が篤い鈴木を推しました。鈴木に反対したのは東條英機でした。「陸軍以外の者が総理になれば、陸軍がそっぽを向く」と高圧的に主張、これに対し岡田啓介（第31代総理）が「陛下のご命令で組閣する者に、そっぽを向くとは何たることか」と叱責しました。東條は

沈黙しましたが、当の鈴木は「とんでもない話だ。お断りする」と辞退します。それでも天皇に拝謁することだけは承諾しました。

木戸の奏薦を受けた天皇は同日の午後10時、鈴木に「卿に組閣を命ずる」と告げます。鈴木は、「軍人は政治に関与せざるべしを信条としている」「高齢で耳も遠い」「政治に疎い」「どうか、その儀は余人に」と頭を下げ続けました。

天皇は「耳が聞こえなくともよい」「政治に疎くてもよい」「この危急にあつて他に人はいない」「頼むから、どうか曲げて承知してもらいたい」。これは懇願でした。鈴木は天皇に懇願させた自分を悔い、不動の姿勢を執り、「不肖、鈴木貫太郎、身命を賭してご奉公申し上げます」と答えました。一人侍立していた藤田尚徳（予備役海軍大将）侍従長は、

「君臣の打てば響く、真に心の触れ合う場面を拝見し、陛下と鈴木閣下との応答のお言葉を耳にし、私は人として最大の感激に打たれた」と語っています。

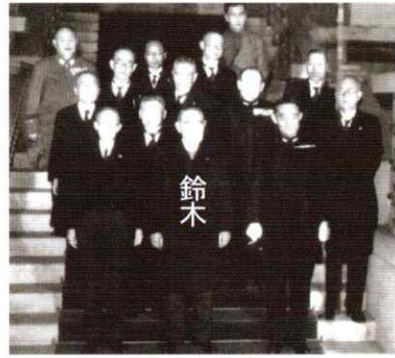


鈴木貫太郎

鈴木は皇太后節子（大正天皇后）に挨拶しました。節子は「鈴木は陛下の大御心を最も知っているはずです。どうか親代わりになつて、陛下のご軫念を払拭してあげてください。また、塗炭の苦しみから国民を救ってあげてください」と涙を流しました。

主要都市が半ば焦土と化し、国家と国民とつて存亡の危機に瀕した昭和20年4月7日、

鈴木内閣が発足しました。鈴木77歳2カ月、現在でも歴代内閣総理大臣における最高齢の就任でした。



鈴木内閣

重臣会議、皇太后節子および天皇の言葉の背後にあるのは「終戦」であり、それを成し得るのは鈴木しかないとの思いでした。しかし、いかにして「終戦」に導くのか、最大の障壁は陸軍でした。巨大な武装組織である陸軍は「徹底抗戦」「二億玉砕」を呼号していました。筋道を誤れば対外的には連合国との戦争、国内的には抗戦派と和平

派の内戦に陥る恐れがあり、陸軍の暴発を懸念した鈴木が発言は、表向きと意中が真逆でした。

終戦への過程

8月9日午前11時から皇居防空壕内で最高戦争指導会議が開かれました。3日前に広島へ原子爆弾を投下され、9日の未明にはソ連軍が満州に侵攻、日本はポツダム宣言(降伏勧告)の受託に追い込まれていました。会議は鈴木が主導し、「受託するしかない」という点で一致しましたが、受託条件で対立します。

東郷茂徳外務大臣は、「条件は国体(大日本帝国憲法下で天皇を統治者と定めた国のあり方)護持の一点のみ」と主張。これに反対したのが阿南惟幾陸軍大臣でした。阿南は「国体護持」は当然、さらに「占領は小規模かつ短期間」

「武装解除と戦争犯罪人の処罰は日本側で行う」と主張しました。会議中、長崎への原爆投下が伝えられましたが結論に至らず、鈴木は議論の場を閣議に移しました。



東郷外務大臣



阿南陸軍大臣

ここでも東郷と阿南が対立。他の閣僚の意見も分かれました。鈴木は強引な意見の統一を避けず、旧憲法下では、承服できない大臣が辞表を出す内閣は崩壊、終戦はさらに遅れ、国民の犠牲は一層増加します。鈴木は午後8時、閣議を休憩して内閣書記官長

(非閣僚だが現在の内閣官房長官に相当) 迫水久常を呼びました。

收拾策を問われた迫水は、「陛下の御聖断を仰ぐ以外に途はないと思います」と答えました。鈴木は「自分もそう思う。実は今朝、拝謁したとき、結論が出ない場合は陛下にお助け(聖断)をお願いした」と明かしました。迫水は、鈴木用の意周到と天皇の御心に感激しました。ただ、聖断をどのような形で受けるのか、伝言では陸軍の抗戦派から「嘘だ」といわれ、逆に混乱する恐れがあり、御前会議で直接聖断を仰ぐことになりました。

御前会議

御前会議とは、天皇が臨席して重要な国策を決定する会議ですが、天皇が発言することとはほとんどなく、法的な根

扱もありません。開催には、慣行として出席者の署名と花押が必要でした。受託条件で対立している状況では、陸軍参謀総長と軍令部総長の署名と花押は困難であり、大きな懸念でした。



御前会議 (撮影日不詳)

迫水は「すでに両総長から署名と花押をいただいております」と報告、鈴木は「懸念を払拭しました。迫水が後日の手記で「半ば騙すようにして」と述べているように、「緊急の場合、いただいている暇がない」「会議では何も決めない」

と約束し、両総長の署名と花押を得ていたのです。

聖断

8月10日の午前0時という異例の時間から天皇臨席のもとに最高戦争指導会議が開かれました。またも受託条件で対立、結論に至りません。鈴木は秘策の禁じ手に出ます。

席から立ち上がると、「議論を尽くすこと数時間、なお議論の遅滞も許しません。誠に異例で畏れ多いことながら、これより私が御前に出て、思召しをお伺いし、ご配慮(聖断)を以て会議の結論といたしたく存じます」と発言、天皇の前へ歩み出ます。

天皇は「朕の意見は外務大臣の申ししていること(条件は国体護持の一点のみ)に同意である」との聖断を下しました。もちろん異議を唱える者

など誰もいません。

聖断とは、天皇の重要な政治的決断を言います。大日本帝国憲法は天皇を無答責とし、決定は輔弼する政府・国務大臣などが行い、全責任を負うことになっています。天皇の無謬性を確保し、かつ天皇への責任追及を回避するためです。聖断を求めることは、天皇に決定を仰ぐことであり、ありえない禁じ手なのです。

8月12日、受託条件に対する連合国側からの回答がありました。国体については「天皇及び日本国政府の国家統治の権限は連合軍最高司令官の制限の下におかれるものとす」という内容でした。翌¹³日午前9時から最高戦争指導会議が開かれました。席上、阿南は「これでは天皇の上に統治者がいることになる。これ国体の根本的破壊なり」と反対、午後4時からの臨時閣

議でも即時受託に同意しませんが、阿南の懸念は、国体護持のほかにクーデターも辞さない陸軍抗戦派の存在でした。

同日、米軍機が日本各地で宣伝ビラを撒きました。ビラには「日本皇帝及び日本政府の統治権は(略) 連合軍最高司令官の下におかれる」と記載されていました。鈴木は最早時間がないとし、「参内して再度御聖断のお願いを願います」と決意を固めます。

既述のとおり、御前会議の開催には陸軍参謀総長、軍令部総長などの署名と花押が必要とす。鈴木は署名と花押を必要としない奇策に出ます。つまり、天皇自らが御前会議を召集する形式をとりました。鈴木は8月14日午前8時40分に参内、拝謁して御前会議の開催を願いました。天皇は開催の予定時間を繰り上げさせ、最高戦争指導会議の出

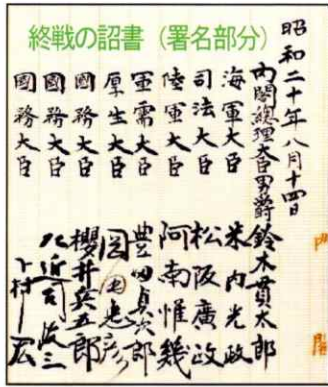
席者に加え、全閣僚も出席させるよう指示しました。

御前会議は午前11時から開かれました。鈴木は「閣僚の大部分は受託に賛成だが、全員一致には至っていない」と報告しました。続いて陸軍参謀総長、陸軍大臣および軍令部総長から、「国体護持について連合国側に再度照会を行い、満足な回答が得られないなら戦争継続を…」との意見が述べられました。

天皇は鈴木を見てから、「他に発言する者がいないなら、自分の意見を言おう」と前置きし、「自分の先般の意見に変わりはない。国体に動揺を来たすというが、そうは考えない。戦争を継続することは、結局国体を護持できず、ただ玉碎に終わるのみ。どうか反対の者も自分の意見に賛成してほしい」と述べました。

この後、天皇は受託する理

由を具体的に述べ、将兵、戦没者、その遺族、そして戦災者に対する心情を語り、最後には日本の再建に尽くすよう諭しました。時に昭和20年8月14日正午でした。この再度の聖断によりポツダム宣言の受諾が決定しました。



「終戦の詔書」の諸手続きが完了し、鈴木と迫水が総理官邸の総理大臣室で休息していた午後11時頃、帯剣した一人の軍人が入ってきました。陸軍大臣阿南惟幾でした。

阿南は鈴木の前に進み、丁寧に一礼し、「終戦の議が起りまして以来、自分は強固な

意見ばかりを言い、総理にご迷惑をおかけしました。謹んでお詫びを申し上げます。自分の本意は国体を護持せんとするにあつたのでありまして、他意のなかつたことをご理解ください」と述べました。

鈴木は「よくわかつております。しかし、阿南さん、皇室は必ずご安泰ですよ。私は日本の前途に悲観しておりません」と応じました。阿南を見送った迫水が戻つてくると、鈴木は「阿南君は暇乞いに来たのだね」と呟きました。数時間後、阿南は皇居に向かつて切腹しました。介錯を拒んだ壮絶な自決でした。

阿南が強硬な意見を述べていたのは、陸軍の強硬派から辞任を強要されたり、暗殺されれば陸軍は後任を出さず、これにより鈴木内閣が崩壊することを認識していたためだといわれています。

鈴木は8月15日午後4時30分に参内、阿南を除く全閣僚の辞表を奉呈しました。退出しようとする時、天皇は「鈴木」と親しく呼び止めました。そして「ご苦勞をかけた。本当によくやってくれた」、さらにもう一度「本当によくやってくれたね」と鈴木を労いました。鈴木は、肩を小刻みに震わせながら大粒の涙を流しました。

鈴木内閣がこの段階で総辞職したのは、終戦に際して内閣の意見統一ができず、禁じ手である聖断を二度も仰いだ不臣の責任を負うものでした。

(注1) 鈴木の内閣が崩壊したのは、8月14日と15日にかけて陸軍過激派による宮城事件が起ったが、ここでは略。

天皇は昭和21年2月、藤田尚徳侍従長に「私と肝胆相照らした鈴木であつたからこそ、

この(終戦)ことが出来たのだ」と語っています。

総辞職後の鈴木とタカ

鈴木は総辞職後に郷里である関宿町(現在の千葉県野田市)に移りました。総辞職後も枢密院議長に再任されましたが、自身が公職追放の対象となったため、以後は公職に就かず、地域の発展(酪農)に貢献しました。

昭和23年4月17日、関宿の私邸で家族らに看取られながら亡くなりました。死の直前、「永遠の平和」と二度呟いたといわれています。享年81歳。茶毘に付された遺灰の中から2・26事件で撃ち込まれた弾丸が発見されました。昭和35年8月15日、従一位が追贈されました。

妻タカは昭和46年9月23日、88歳で亡くなりました。関宿町の名誉町民第1号だった

た彼女の葬儀は、町葬として関宿小学校で営まれました。亡くなってから7年が経過

した昭和53年12月4日、天皇は須崎御用邸での記者会見で「タカとは私の母親(大正天皇后/皇太后節子)と同じように親しくした」と語っています。

タカは宮内庁が編纂した「昭和天皇実録(全61冊1万2137頁)」に約70回登場しているそうです。余談ながら、鈴木貫太郎本人は30回といわれています。

(注2) ネット上には鈴木に関する資料が多数あり、本文の内容と異なる出典もあります。

(注3) 八丈島の写真を除き、本文に掲載されている画像は、ネット(グーグル)上の「改変後の再使用が許可された画像」から借用。

機関誌の文責について

本誌「宿場町ひらかた」の文章のうち、著者名のあたるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、少し原文と異なる部分もありますが、変更後も著者の確認を得ており、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

新入会員紹介

(平成30年10月1日現在)

- 松山 正之さん 町楠葉
- 君塚 計之さん 藤阪北町
- 岡崎 智さん 招提南町
- 長谷川春夫さん 茄子作北町
- 藤村 彰宏さん 伊加賀西町
- 奥野 忠子さん 津田南町

会員を募集しています

本会は、年数回の講演会や観光バスを利用した他宿場などの日帰り見学会の実施、機関誌(本誌)を発行しています。

会費は3600円(1年度)です。入会をお待ちしています。ご希望の方は上野まで。電話(832)5722。